資料７

第1期地域計画（令和5～7年度）のふりかえりと次の計画づくりに向けて

令和8年度　第1回　京丹後市文化財保存活用地域計画推進協議会

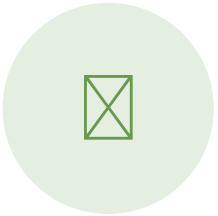
これまでの歩みをふりかえり、次の計画（第2期）づくりへ進みます。

第1期計画でこんなことが進みました



把握調査を進めました

京都府立大学・丹後ひくやま会との官民学連携により、弥栄町味土野・久美浜町山内・佐野甲等の山林寺院調査を進めました。



調査成果をデジタル化

京都府ミュージアム連携事業を通じ、震災復興建築や断層の3Dスキャン、震災資料のデジタルアーカイブ化を行いました。



守る対象が広がりました

令和7年度文化財保護審議会を経て、新たに3件を市指定文化財に指定しました。



市民が主役の体制づくり

「京丹後市市民遺産会議」が発足。計画初年度に目標を達成し、市民遺産認定と独自の補助金制度を創設しました。

京丹後市文化財保存活用基金の設立

本市の貴重な文化財について保存及び活用を推進するにあたり、必要な財源を確保し、当該事業を推進するため、京丹後市文化財保存活用基金を設立。基金の設置により、文化財の保存及び活用の事業に対し寄附金を確保、活用することが可能となりました。

成果①「官民学」による連携

「湯舟坂2号墳」を中心に、守ることと活かすことを両立しました

大学・学校・地域

京都府立大学ACTR事業を軸に、高龍小学校・丹後緑風高校・須田区と連携。発掘体験などを通じて次世代の学びを育てました。

湯舟坂2号墳
プロジェクト

国・市・専門家

国指定重要文化財「丹後湯舟坂二号墳出土品」の4年にわたる保存修理が完了。丹後古代の里資料館での収蔵・公開へ着実に前進しました。

成果②　史跡が「人の集まる場所」に

網野銚子山古墳の整備が完了し、地域の可能性が見えてきました

施設の整備



駐車場の整備とガイダンス施設の建築が完了。ユニバーサルデザインの説明パネルで、誰もが訪れやすくなりました。

にぎわいの広がり

約1,000人

整備完了の記念イベントが大成功。約1,000人が来場し、史跡の集客力と地域資源としての価値が証明されました。

成果③　産業・観光・教育への広がり

産業観光・文化遺産のオープン化

丹後オープンファクトリー2025（NeoTAN）

28の現場（丹後ちりめん・機械金属等）が一斉に参加。職人の技やこだわりを直接公開し、産業の歴史を「体験型観光」へと広げました。

京丹後歴史文化めぐりマップ

市内の歴史文化を紹介するポータルサイトを創設しました。

みんなで学ぶ郷土教育

「大地の学習」の全校展開

市内の全小学6年生が体験。郷村断層の見学や震災学習を通じて、地域への愛着と理解を育てるしくみができました。

「地域学習副読本」の全校展開

丹後学で使える新たな仕組みの副読本を全校に展開しました。

次の計画に向けて、これから取り組みたいこと

見学だけのスタイルを見直したい

新緑のブナ林観察会（内山ブナ林）

参加者が7名まで減り、令和8年度以降は終了することに。「ただ見学する」だけのモデルは、見直しの時期にきています。

参加者数の推移：8名 → 7名 → … → 2名へ

コンテンツを生み出す人を育てたい

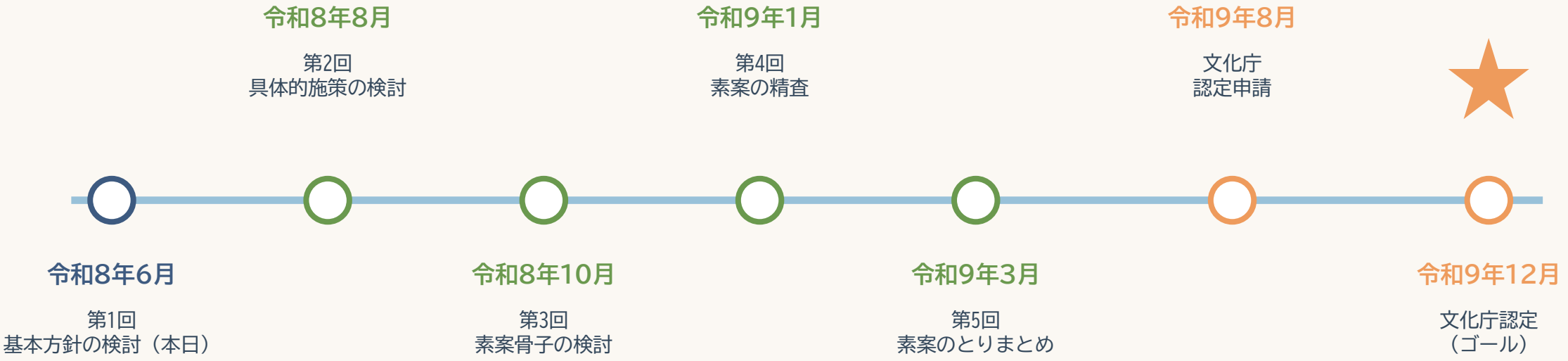
これからの課題（基本方針1-4-22）

「歴史文化を活かしたコンテンツをプロデュースする人材の育成」は、これから取り組んでいきたいテーマです。

ポイント：資源（モノ）は揃っています。これからは、今のニーズに合わせて活かす「人」を育てることが第2期の大切なテーマです。

第2期計画づくりのスケジュール

文化庁認定（令和9年12月）に向けて、無理のない流れで進めます



申請（令和9年8月）まで約1年。協議会は全5回で「素案」をまとめていきます。一つずつ着実に進めましょう。

次の計画で大切にしたい視点:100周年を軸に

防災教育の深化

震災関連の遺構や過去の記憶を活かし、実践的な防災教育へとつなげていきます。

令和9年「丹後震災100周年」

郷村断層の保存活用計画づくりと、ジオパーク拠点としての磨き上げ。地域を元気にする力にしていきます。

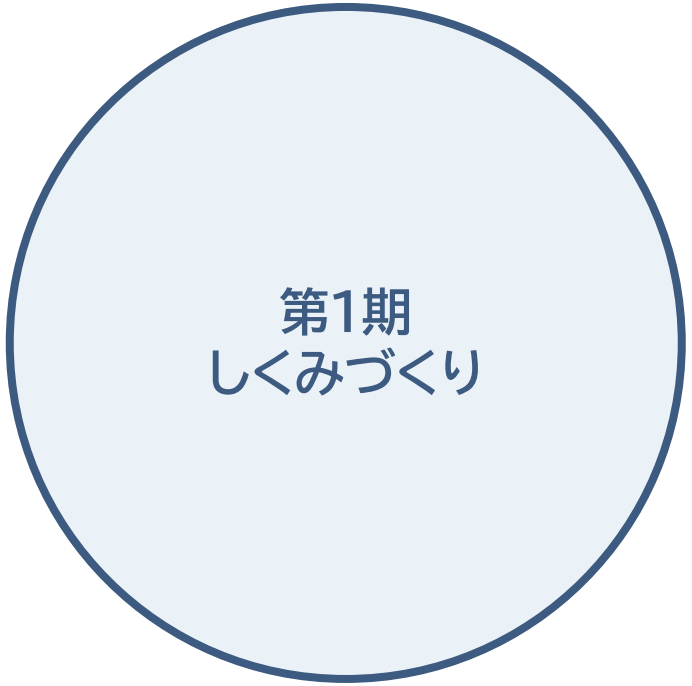
広域観光・DMO連携

「海の京都DMO」等との連携を強め、点在する文化財を「海の京都」エリアのみならず日本海エリアを含む広域の「文化観光」ルートとして面でつなぎます。

丹後震災記念館の耐震化・利活用

丹後震災記念館の今後について着実に検討を進めます。

これから：第2期で大切にしたいこと



文化財の把握調査、デジタル化、
「市民遺産会議」という土台づくり。



文化財の広域観光利用、人材の育成、
震災100年の活用へ。

第1期でつくった「しくみ」を、第2期で「実践」へと育てていきましょう。